

明治座今昔

長谷川時雨

青空文庫

芦寿賀^{ろすが}さんは、向う両国の青柳といった有名な料亭の女将^{おかみ}でもあった。百本杭^{くひ}の角^{かど}で、
 駒止橋^{こまどめばし}の前にあつて、後には二洲楼^{にしゅうろう}とよばれ、さびれてしまったが、その当時は格式
 も高く、柳橋の亀清^{かめせい}よりきこえていたのだ。横浜にいった最初の旦那^{だんな}は、判事さんだと
 いうものもあつたが、その人はどうしたことが切腹してしまったのだ。

だからおしよさんが、お嬢さんあいての月謝をすこしばかり集めて、二絃琴^{にげんきん}なんぞ教
 えているということは、めんどくさかつたろうと思う。慰^{なぐさ}み半分の閑^{ひま}を消すためだつた
 かもしれない。

おしよさんの家の箆^{たんす}の上の飾りものの数は言いつくせない。およそ美術的にかざつた
 玩具^{おもちゃ}の数々——ああした趣味もこれからの世間には見られまい。下品なものではなかつた。
 隣家^{となり}に常磐津^{ときわづ}の老^お婆^{ばあさん}師匠^{しせう}が越して来て、負けずに窓のある部屋へ見えるように飾りた
 てたりしたが、覗^{のぞ}いて見ると、それは子供にも不思議に思えた男の子のつけているものの
 かたちを、かざりならべておがんでいた。

おしよさんの家^{うち}へは、綺麗^{きれい}な娘さんたちが多く来た。みんな美しい人だつた。お母さん

や、ばあやさんの自慢の娘さんたちだった。鴛鴦おしどりに鹿かの子こをかけたたり、ゆいわた島田に
いったり、高島田たかしまだだったり、赤い襟に、着ものには黒縹くろじゆす子すをかけ、どんなよい着物で
も、町家ちやうかだから前まえかけをかけているのが多かった。前垂れの友禪ゆうぜんちりめんが、着物よ
り派手な柄だから揃そろつていると綺麗だった。春の夕暮など、鬼ごっこや、目かくしをする
と、せまい新道に花がこぼれたように冴さえ々ざえした色彩いろが流れた。玉村の——お菓子屋の—
—お島ちゃんさんしやは面長な美女で、好んで黄八丈の着物に黒じゆすと鹿の子の帯をしめ、鹿の
子や金紗きんしやを、結綿ゆいわた島田の上にかけているので、白木屋お駒こまという仇名あだなだった。山口屋
——本問屋——のお駒ちゃんこまは八百屋お七——お駒ちゃんの妹こまの幸ちゃんこしやうは実にはつちり
した、若衆だちの顔つきだった。天野さんの——化粧品問屋——×さんはおとなしく、金
物問屋のおぬひちゃん、袋物問屋のおよしさんその他の人たちも醜いのはなかった。
高い脚立きゃたつをかけかついで駈かけてきた点燈屋てんとうやさんも、立止つてにこついて眺めている。近所
の人たちはいうまでもない、通行の人たちも立止っている。そんな時、おしよさんはどん
なことを思っていたろうか、いつか、こんなことをはなしたことがあった。

「あたしは十五の時お母さんに叱しかられたことから、ふと死にたくなって、矢の倉河岸がし（大
川端）に死ににゆこうとしたら、町内の角に木戸口があった時分のことでね、急いでゆく

前にぱたんと立ちふさがったものがあるので、怖々顔をあげてみたら、男の首くくりがぶらさがっててね、あつと思つたとたん死神がどこかへ飛んでしまつて——」

「その時、おしよさん、どんな姿なりしてた？」

何でも訊ききたがる私は、話にぶらさがるようにきいた。

「ゆいわたしに結つて、黄八丈の——あたしや、まあいやだよ、いい氣になつて……この子はいけない子だ。」

ふと、その頃の自分とおんなじような、年頃の娘たちをあずかつている事を思出したのだから笑つてしまつた。

だが、その娘さんたちに交つて、娘のような、娘でないような人がひとりいた。お金ちやんにきくと、アンポンタンが知る前に阪地かみがたへいった人なのだそうです、曙山しよざんさんというのだといった。

曙山という名は、アンポンタンにも新しいものではない、まさかに子供でも、錦絵の智識はねさえもんから羽左衛門わがみうめゆきとか尾上梅幸とかよぶようなこともしなかったから、曙山とは、沢さわむ村田之助らのすけの俳名はいみょうだと知つていた。幕末頃のくさ草紙には、俳優田之助が人氣があつたからか、小意こいき気な水茶屋の女なぞに環菊かんぎくのお田たの之とかなんとか書いてあつたほどだか

ら、俳名の曙山も目からくる文字の上でのおなじみだった。

その女は黒い顔で、大きな鼻で、体はグニャグニャとしていた。長じゅばんが裾から蹴出されると、緋ぢりめんだったり、薄紫ぢりめんだったりした。黒ぢりめんに加賀紋の羽織を着て、風呂敷ほどの絹半巾を鼻からまいて、車からおりと、

「おツしよさん——」

て鼻声を出して、踊るように袖をバタバタさせて、

「おお寒む寒む、はよう温かいものでもおくれ。」

と妙に甘ったれた調子で太い声を出した。

みんなが羽根や手鞠についていると、

「わたいも、つこ。」

と仲間になる。

「さあ、あんたはん、あげますウ。」

と器用に、なんでも巧者だ。

アンポンタンは思った。この女は、どつか大きな家の娘で、病氣——ばかのようなので、髪を断らして遊ばせてあるのだらう、だから、あんなに無作法なのだ——そう思えたほ

ど、堅氣かたぎの娘たちとは調和しない奔放ほんぼうさがあつた。

その人は斬髪ざんぎりだつた。だが、その女の人が、なんで田之助の俳名つながりと関係があるのか
がわからなかつた。あたしの解釈では、くさ草紙の人物、環菊のお田之たのさんのように、こ
れは生きた人間が田之助ぶつているのだらうと思つた。しかし、環菊のお田之はそれは美
しい女に描いてあるが、曙山という女は汚らしかつた。だから言つた。

「あの女ひと、氣狂い？」

すると、お金坊は金切り声を張りあげて、

「おツさん、曙山さんのことを氣狂いかつて！」

「悪い子がいるね、誰がわたしのこと氣狂いというた。」

太い声がモツタリといつて、こつちを振りかえつた。

「あの女の人、黒い汚ない顔だつて。」

「フン、黒うても白うなる、白粉おしろいつけて美しうなつて見せてあげる。——金坊、おツさ
んに白粉おしろいだしてもろうとくれ。」

あたしは怖氣こわげだつた。氣狂いが、白粉をつけだしたりしてどうなるのかと——
丸い手鏡を片手に持つて、白粉刷毛おしろいばけでくるくる顔をなでまわしていた曙山さんは、傍ら

にいるおもよどんや、お金ちゃんを顎あごでつかつて、紅べにをとれの、墨をかせのと、命令するように押おしつぶした声で簡単にいいつける。

「その手拭てぬぐいをおよこし。」

鏡台わきの手拭かけにあった白地に市川という字が手拭一ぱいの熨のし斗の模様になつて、
筵えんしょう 升と書いてある市川左団次の配り手拭をとらせると、上手に姐あねさんかぶりにして、
すつと立上ると、

「おツさんの寛袍どてらをもつといで。」

と自分の帯をときだした。

あたしはとんでもない事をいつてしまったとしよげていたが、廻りの者はゲラゲラと笑つて面白がつている。

曙山さんという人は、わざとらしく怒りつぽく、

「お腹なかがすいとるのに、みな面白そうに笑つてからに、わたしばかりこんなことさせて——
—おごらんかったら怒る。」

「どういたしまして、これこの通り、ちゃんとお仕たくはしてございます。」

おもよどんはそんな事をいつて、大きなお膳の上にのせたおすしの大皿と、もひとつの

高脚膳おげんにのせたものをはこんできた。その上には酒徳久利さかどつくりものつている――

「では、まず一ツ――」

曙山さんは立ちながら腰をかがめて、お猪口ちよこでなく、そばの湯呑ゆのみをとってお酒をついで、ごくごくと飲みほした。

あたしはまた溜息をついた。おしよさんはなんでだまって煙草タバコなんか長い煙管キセルからのんきにふかしてるのだろう――

と思いがけずおしよさんがこんなことをいった。

「お前さんがそうやってると白糸しろいとがよさそうだね。」

「あたしもそう思う、鈴木主人もんどをつきおうてくれるものがあれば――」

「川崎屋（市川権十郎）ならいいけれど――」

曙山さんは、ふと、アンポンタンを見た。

「あの子がわたしのこと気狂というたのやろ、ほんに無理もないこと。これ御覧、綺麗きれいな長じゅばんだつしやろ。」

姐さんかぶりの曙山さんは、褌つまをあげて見せたが、

「よい事がある。」

といつて着物を脱いでしまった。下には薄紫に遠山紅葉の裾模様のあるちりめんの長じゆばんを着て、白はかたの細帯をまいていた。

「この上へお着せ。」

おもよどんが、紅絹裏の糸織のどてらを長く上にかけた。

曙山さんは懷紙で顔をあおぎながら立膝をして、お膳の前の大ざぶとんの上に座り直した。

「さあ、みんなおすしおあがり。」

おそろしく横柄だった。あたしはかつて他人から、そんな風に声をかけられたことがなかったから、いよいよ氣狂いだと思った。けれどみんなは、嬉しそうに、楽しそうに、ゲラゲラ笑っていた。

この人の正体がやつとわかった。女形だったのだ、旧時代の遺物そのままに育てられて、久しく阪地へいつていた俳優だったのだ。東京の水になれないので、むかしのままのお坊ちやんで、とお師匠さんはある時いつていた。お金ちゃんの説明によると、

「曙山さんは女の通りに育てられたのよ。けど、ほんとに女かもしれないわ。裁縫もおしごとくするし髪も巧者に結うし、なんでもかでも女の通りよ。だけど男だつていうの、女の

通りに育てられた男だつていうの。こんど来たら、なんだか男と半分半分になつちやつたけど、もうせんには、ほんとに女だつたわ。だから、おツしよさんも、女のお弟子さんとおんなじだつて——」

そしていった。この間も、新富座しんとみざへ乗込みのときは、以前せんの通りに——鬘かつらだつたけれど——樂屋下地に結つて、紫のきれを額にかけて、鼈べっこう甲かんざしの簪かんざしをさして、お振袖で、乗組んだのだと。

あたしは気味がわるいと思つた。どうしたつて、あの大きな黒い顔は、そんな、花やいだ、たおやかさを思わせはしなかったから——

ともかくこの人は、結局女ではなかったのだ。でも、その後、時々面白い笑話がきかされた。

盲目めくらの坊主頭のお婆さんが死んで、その法事ほうじのかえりに、浅草田圃たんぼの大金たいきん（鳥料理）へいったらその人たちが、どうした事か、家業柄にもにず、この女形を完全に女にしまつて、御後室様ごこうしつさま御後室様と、お風呂まで女風呂へ案内したとか——

またそののち、曙山さんの名を養家へかえしてしまつて、市川の門下になつた。時勢はいつまでも彼を娘と見るような甘いものでもなく、彼もまた臺とうのたつた女おんなおとこ男になつて

しまったが、娘ぶりより、御後室の方がまだしも気味わるくない。新富町の露路裏に、男役者と、やもめ二人が同居していたが、そんな時、彼はすっかり世話女房だった。片つぽが帰らない朝なんぞはブツブツいつて女中と一緒に働いていた。

ある朝、片つぽの男に捨られた女が、勢い猛に押寄せて来た。彼女は、昨夜、自分の情夫が他の女と一緒にいたことを耳にして、大変なけんまくで駆けこんで来たのだ。彼女は下駄もはいたままで座敷へ飛込みかねない物、凄い有様だった。あたしを差おいて——と彼女はいった。彼女は彼の家の火鉢の前に座るべき正妻の権利を第一にもちうるものは自分だと信じてるのだ。だから障子をガラリとあけた。

「どなた——」

ぼやけた声がする。

はて！ 女もさすがに躊躇した。

「あたしです。」

「あたしって、どなた？」

彼女は、自分の位置であるべきもののような問方をするのが小癪にさわった。けれど、来たわけをいわないわけにはいかない。

「××さんはいませんか？」

「ええ、まだ帰らないんですよ、あきれつちやうじやありませんか、何処どこをウロウロしているのだから。」

女はギリリとして障子の中を覗のぞいた、そこには、姐あねさんかぶりの後むきが、小意気な半纏はんてんを着た朝の姿で、たすきをかけて、長火鉢ながしぼちの艶拭つやぶきをしていた。

「まあ！ あなた、おかみさん——」

女は、しどろな言葉で挨拶あいさつして、来た時の勢いとは、くらべものにならないしよげかたで、どぶ板に、吾妻下駄あずまげたの音を残して帰っていった。

なんだろうまあ、あの女は折角来たのに、用向きもいわないで——と思っていると、

「おおこわ、こわ！」

といって、同居の片つぽが帰って来た。そして、姐さんかむりの仲間を見ると、フツと吹出して、

「おかみさんがいるのに、なぜ、いわなかったってや。」

といって、カラカラ笑った——

いまこの人は老女役ふけやくになつて、生れ土地の関西へ帰っている。

久松町の千歳座ちとせざが焼けて、明治座が建つと、あの辺は一体に華やかになり、景気だった。芝居小屋がやけて芝居小屋がたつのに、そんなかわりがあるかといいたいほど代った。明治座前に竈河岸へつついがしへかけて橋がかかった。川を離れてその橋じりへまで、芝居茶屋が飛んで建ったほどだ。明治座は橋にむかった角で、芝居茶屋は右手に並んでやまと、はりまやと五、六軒、通りをへだてた横に日野屋さぬきや六、七軒、楽屋口うらに中村屋が一軒、みんな大間口の素晴しい店だった。茶屋は揃つて、二階に役者紋ちらしの幕を張り、提灯ちんをさげ、店前みせさきには、鼯鼠ひいきから役者へ贈物の台をならべた。劇場の表飾りもまけずに趣好をこらし、庵看板いおりをならべ、アーク燈を橋のたもとに点けたので、日本橋区内には、今までになかった色彩いろどりをそえたのだった。それが人気にあつた。しかも中洲なかつは開けたばかりですぐ近く、前の川の下である。橋をわたれば葭町よしちようの花柳場さかりばがあり、いんしんな人形町通りがあり、金のうなる問屋町にとりまかれて、うしろには柳橋がひかえている。ずっと昔、浅草猿若町へ、三座がひけぬ前の、葺屋町ふきやちよう、堺町さかいちようの賑いちゆうしばいをとりかえしたかの観を呈した。もともと千歳座があつたが、中芝居ちゆうしばいであり、人気のあつた中島座は小芝居ですでに焼けて亡び、中洲に真砂座まさござがあつても、歌舞伎の稽古芝居けいこか、新派であつたの

で、明治座はたいした人気となった。

それに、そのころ尾上一家の細かい芸よりも、豪宕ごうとうな左団次さだんじ（今の左団次のお父さん）が時流に合つて人気を得ていた時で、その左団次が座頭ざがしらであり、団十郎が出動し、福助（今の歌右衛門）が女形おやまだといので、左団次さだんじ鼯鼠ひいきの力ちから瘤こぶは大変だった。

二絃琴のおしよさん芦須賀さんは、その左団次が、若い時からの岡惚おかぼれだといつてさわぎ出した。

だから、曙山さんは左団次の弟子になった。おしよさんは、当地に馴染なじみのない人だからと、毎日毎日楽屋へいろんなものをもたしてやる。ほかのものはいいがお汁粉しるこをどっさりこしらえてもつてゆく時は、おもよどんは運ぶのに大変だ。とにかく、お稽古はそつちのけで、明治座のはなしに無中になつている。

アンポンタンは十二、三の時から、あの貧乏な勝梅さん（前出、長唄の師匠）の蠣殻かきがら町ちやうの家から出ると豊沢団とよさわだんなんとかいう竈河岸へつがいがしの義太夫の師匠の表格子にたつて、ポカンと中の稽古をきいて過し、びつくりして歩きだして橋を渡ると、千歳座の前で看板にひっかかり、それから附木店つけぎだなまで歩いて、本箱の虫になって、家から迎えがくるか、おもよどんかお金ちゃんに送りながらわびてもらつて、暗くなつてから家へかえる習慣にな

つていたから、明治座が出来たから急に芝居の前にたつわけではなかったが、みんなとは違った意味で、自分の欲をたんのうさせてもらった。

もともと家では、長唄が一日、二絃琴が一日と隔日にといのを、盲目の勝梅さんの方はトットとすませて二絃琴に通うのだった。しまいには、勝梅さんは三日おき四日おきにしかいかなかった。月謝が早く手にはいらないと、勝梅さん一家は当惑してしまう（妹と二人分だから）。そういつては悪いと思つても、貧にはかてずお婆さんかお君ちゃんがとりにくる——あたしの母はいくらその困ることをあたしに言いきかせてても、月謝を届けるのがおくれるので、それから毎日けいしをあけて唄本の間を調べる。毎日そのままだ。もう二絃琴はさげてしまうと怒った。ほんとにさげられてしまった。

けれど、あたしは平気で、無代で稽古しに出かけてゆく。それがあたしの権利のように——おしよさんはなんとも言わなかったが母の方が困った。あたしは稽古そっちのけで芝居の研究をする——

研究というときこえがいいが、覗いてきたままを台所でやるのだ。譬は、丸橋忠弥の堀ばとか、立廻りの見得とか、せまい台所でほんものの雨傘をひろげるのだから、じきに破いてしまうが、一方ならぬ高島屋びいきは、小言どころではない。よくおぼえてき

たよくおぼえてきたとほめる。ここの立廻りは、いくつ踏んで、トントントンとこうきまると、棒をふりまわして柵のものを破こわしても叱しからない。わからないところがあると、おもよどんにくつついていつて楽屋から見学だ。いつまでたつてもコツののみこめない下廻りを見ると、おとなって、なんて物覚えが悪いんだろうなんて生意気にも思う。

左団次の、新富町の家の稲荷いなり祭りなんていうと、おしよさんは夢中だ。それでもきまりが悪いので、むこうにゆくと子供衆しゅたちが大悦よろこびで——なんていつている。

現在いまの左団次はアンポンタンとおなじくらいだから初舞台から知ってるわけだ。新富座の『和田合戦』の佐々木小次郎だったか、まんまるく大福餅だいふくもちのようなのを覚えている。

その後明治座時代の、少年期の彼はへたくそ——だが、一体に少年期に大成するものは、早くのびが縮まるようだ（私は彦三郎や、寿三郎を、後に異なる味をだす役者だといって、みんなに、まだですか、だいぶゆつくりだが、まだ見どころありですかなんて笑われるが、私はまだだと言っている）。左団次の今日あるを少年期の時誰がいいあてたろう、自分でも少々悲観していたのをしっている。舞台へ出るときまりわるがって、うつむいて、モヅとものを言う。まっすぐに述べてしまうとまっすぐにひっこんでゆく——見物は気の毒せがれそうな顔をする。お父さんが働きてで、人気ものだけに、若い倅せがれの人気のないのが、一

層はかなげに思われたのだった。

「銀行家にしようと思うのだが——」

と、あの舞台では睨^{にら}みのきく眼が、慈眼というように柔和になつて、楽屋では、これも大町人か、それこそ、そのころの、あまりこすくない銀行頭取の面影^{おもかげ}をもったお父さん左団次がゆるやかに話す——

ぼたんが小米^{こよね}になつた。おしよさんのうちへあそびに來た。いつも楽屋や舞台で、知りきつた顔なのに、この少年は背広を着てきて、キチンと座っている。一言も口をきかない。廻りのものやおしよさん夫婦は種々骨^{いろいろ}を折つてしゃべるが、かんじんの少年客はムツとしている。そのくせ帰ろうともいわない。

そこでアンポンタン、大成した彼の舞台を見、舞台の悪党ぶりを見、息をひいて、白い眼をむいて、顎^{あご}でしやくつた太々^{ふてふて}しさを見ると、ウフツという笑いが、表面へ出ずお腹の底の方で笑う。それほど少年の客小米の、キクイクジョたる風采^{ふうさい}が、教育勅語を読む山間の模範少年か、社主の前へ出たであろうところの、××会××社の少年諸君にもさもにたる勤直ぶりであつたから——

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

明治座今昔

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>